

小学部 第2学年国語科の実践 表現活動を中心とした在籍学級における日本語支援

【授業者】谷垣 諒

1 単元名

「ことばでみちあんない」(たいわのれんしゅう)

2 単元目標

- (1) 共通, 相違, 事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。【知識・技能】
- (2) 相手に伝わるように, 話す事柄の順序を考えることができる。【思考・判断・表現力】
- (3) 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞くことができる。
【思考・判断・表現力】
- (4) 話す事柄の順序を粘り強く考え、学習課題に沿って道案内をし合おうとすることができる。
【主体的に学習に取り組む態度】

3 目標項目との関連

ステージ5 (教科につながる学習)

α「学習内容について、複文を使いながら、順序だてて話す」

4 児童生徒の実態について

本学級は、男子6名、女子6名の計12名である。中国にルーツを持つ国際結婚家庭の児童が半数以上を占め、そのうち数名の児童には日本語能力に課題が見られる。

学級全体の雰囲気として、話すことに対して意欲的な様子が見られる。教員に対しても、友人に対しても、経験した出来事やその感想など、積極的に伝えようとする姿勢が多くの子童にあり、自分の話を聞いてほしい、自分の思いをわかってほしいという気持ちが強く表れている。

しかし一方で、クラス全体で発表する場面などでは、緊張して上手に話すことができない児童も多い。また、話したいことを羅列してしまうなど、出来事などを順序立てて話すことに大きな課題を感じている。

児童の伝えたい想いを大切には育みながら、伝えたいことを順序立てて話すことについて継続した指導の必要性を感じている。

5 単元について

本単元は、教材文で道案内の問題を見つけることや、実際に道案内の練習することを通して、相手の立場に立ってわかりやすく順序よく話すことや、大事なことを落とさないように聞くことをねらいとしている。

道案内という活動の中で、日常の言葉の体験をゲーム的に楽しみながら、対話の力につなげることができるスキルアップが期待できる教材である。また、本単元に取り組むにあたり、「まず」「つぎに」「そして」「さいごに」など、文をつなぐ言葉に着目させ、定着を図りたいと考えている。

本単元を通じて、順序立てて話すことができたという実感を味わわせ、日常生活や他教科の中で活か

そうとする態度へとつなげたい。

6 日本語支援について

日本語能力に課題がある児童に対して、二つの手立てを用意している。

一つ目は掲示の効果的な活用である。「まず」「そして・つぎに」「さいごに」などの言葉について教室に掲示することにより、授業の中で意識づけを行い、常日頃から順序立てて話すための「文をつなぐ言葉」の定着を図る。

二つ目はワークシートの活用である。道案内の仕方を考える場面と聞き取りの場面では、二種類のワークシートを用意する。(①説明の文を全て書き入れるワークシート、②「文をつなぐ言葉」と「キーワード」だけを空欄に書き入れるワークシート) 必要な言葉を最小限に絞ることで、配慮を要する児童もポイントが分かりやすくなると考えた。

7 単元構成

時数	【学習課題】	【ポイント】 ○表現支援の視点 ◆バイカルチャルの視点	【備考】
第1時	「道あんないのし方を考えよう」 ●教科書の道案内の例を聞き、わかりやすいかどうか話し合う。 ●正しく伝えるためのポイントを整理する。	○わかりやすく説明するために順序立てて話すことができるよう、文をつなぐ言葉に着目させる。 →学級掲示により定着を図る	
第2時	「わかりやすい道あんないを考えよう」 ●教科書の地図をもとに道案内（ロールプレイ）に取り組む。 ●良いところや課題について交流し、よりよい説明ができるようにする。 (3人1グループ)	◆聞き手を経験させることで、相手の立場を考えて話すイメージを捉えさせる。 ○ワークシートを活用し、文をつなぐ言葉に留意して話したり聞いたりさせる。	
第3時	「たからまでの道あんないをしよう」 ●それぞれ宝の地図を作成して、友人に宝のありかまでの道案内をし合う。(3人1グループ)	○ワークシートを活用し、文をつなぐ言葉に留意して話したり聞いたりさせる。 ◆大連市内や住んでいる地域の地図を取り扱うことで、身近な地域について振り返るきっかけとする。	オンラインにより実施する。



【他教科、日常生活への関連】

★第2学年 生活科（プログラミング学習）

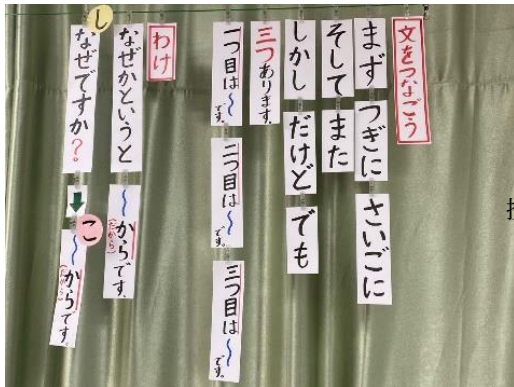
学習内容	【ポイント】 ○表現支援の視点 ◆バイカルチャルの視点

「イモムシくんを家に案内しよう」

●矢印により動きをプログラミングできるイモムシのキットを活用し、グループごとに操作を行う。

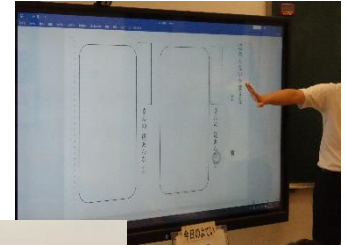
○「まず」「そして・つぎに」「さいごに」などの「文をつなぐ言葉」とプログラミングを関連付け、学習の中で活用させて、定着を図る。

7 資料

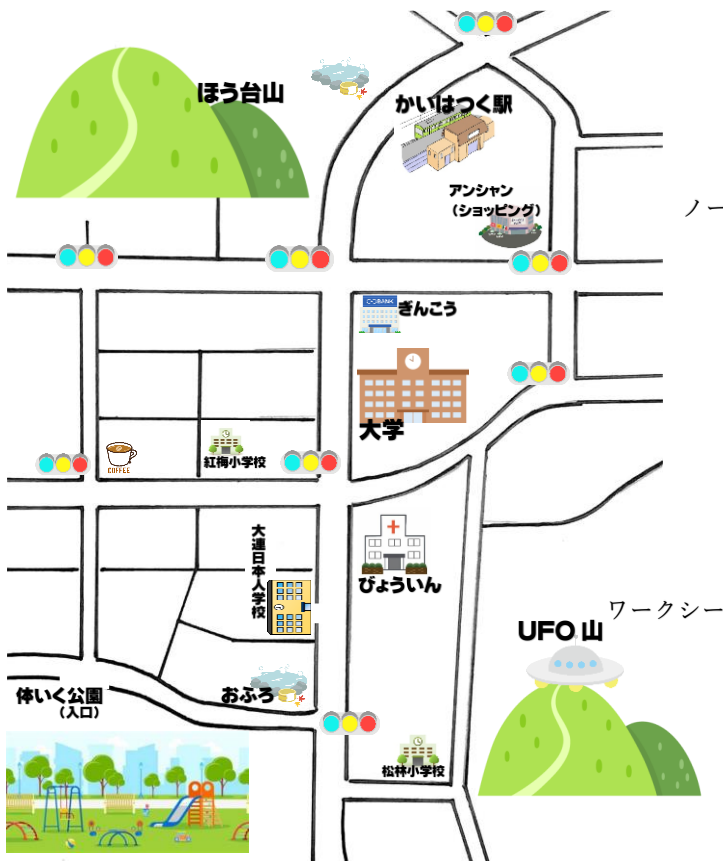


教室掲示

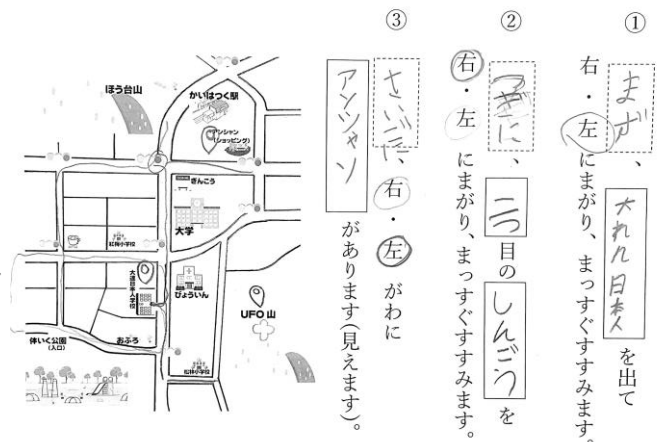
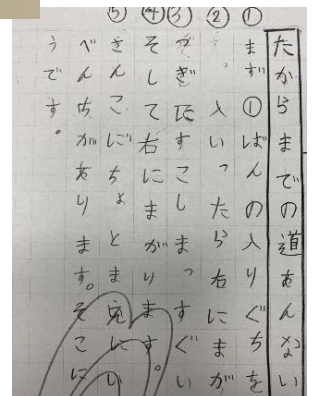
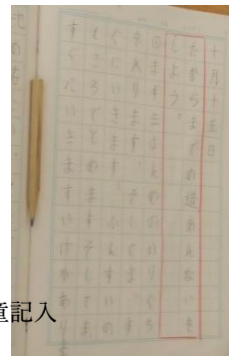
授業風景



道案内地図（大連・学校付近）



ノート 児童記入



8 考察

「まず」「つぎに」「そして」「さいごに」などの接続詞を「文をつなぐ言葉」として教室に掲示し、日々の日記やノート指導の中でもそれらを適切に用いることができるように指導してきた。この単元を通して、全員が文中に用いながら、順序立てて説明することができていた。

道案内の地図として、学校周辺の地図を用いた。生活科での町探検をした際の様子を振り返りながら学習を進めることができた。この地図を身近なものとして捉える児童が多く、地図に情報を書き込む児童や自分の家までの道順を説明する児童も見られた。特に近隣から通う日本語に支援が必要な児童にとっては、道案内する上でイメージしやすいものになっていた。

この単元では、「道順を説明する場面」と「説明を聞く場面」の手立てとしてワークシートを活用した。配慮が要する児童にとって、ワークシートの型に書き込むように支援したことは有効であった。全員が順序立てて説明することができたことにつながった。ワークシートやノートに自分の考え（宝までの道順の説明）を書き起こしたことで、自信をもって堂々と発表できていた。

全員が話し手と聞き手を経験したことが、分かりやすく伝えるために必要なことを、より深く考えるきっかけとなっていた。自分が説明する際には、話すポイントを意識し、話すスピードや目印となる箇所を強調して言うなどの工夫が見られた。

宝を隠す場所によっては、道順が複雑になる場合や説明が長くなる場合があり、ワークシートのパターンを増やすべきであった。配慮の要する児童も接続詞を用い、順序立てて話すことができていたが、言葉の書き間違いもみられ、語彙の面で課題を感じた。

今回は3人1グループでの話し合いをしたが、ペア活動（対面やフリーでペアを探していくスタイルなど）、効果的な形があったのではないかと考える。練習回数を重ねる上ではペアでの活動がもっとあった方が良かった。繰り返し練習する中で定着を図っていくとともに、グループ時に必要な学習規律をより丁寧に指導する必要がある。

【参考文献】

『外国人児童生徒の学びを創る授業実践』（編）齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子
くろしお出版 2015年6月1日 第1刷発行